

画家・近藤嘉男による子ども向け絵画教室「ラボンヌ」
—— 戦後の前橋における民間による美術教育についての一考察 ——

春原史寛

**A Study on “La Bonne”, Painting Class for Children
by Artist, Yoshio Kondo**

—— A Consideration on Art Education by Civilians
at Maebashi after World War II ——

Fumihiko SUNOHARA

画家・近藤嘉男による子ども向け絵画教室「ラボンヌ」

—— 戦後の前橋における民間による美術教育についての一考察 ——

春原史寛

群馬大学教育学部美術教育講座

(2016年9月30日受理)

A Study on “La Bonne”, Painting Class for Children by Artist, Yoshio Kondo

— A Consideration on Art Education by Civilians at Maebashi after World War II —

Fumihiro SUNOHARA

Department of Art, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted September 30th, 2016)

1. はじめに

近藤嘉男（1915～79年）は前橋の地に生まれ生活した画家であった。宮本三郎に師事して二紀会で東京において活躍し、また二紀会の群馬支部や、群馬県展でも重要で中心的な役割を務めるなど、群馬県の美術文化の発展にも大きく寄与した人物である。わかりやすく把握するために、群馬県関係美術家のなかでの世代を考えるならば、1912年生まれのオノサト・トシノブとほぼ同世代、山口薫と鶴岡政男は共に1907年生まれで少々先輩、1898年生まれの福沢一郎や、同じ前橋生まれの南城一夫は1900年の生まれだからひとまわり以上若いということになる。近藤は終戦時に30代に入ったばかり。再興に向かう戦後群馬の文化を若手の中心となって作っていく世代にいた。

このような画家・近藤嘉男が、前橋を中心とした美術教育にも大きく関与していたことは見逃せない。彼が設立した子ども向け絵画教室「ラボンヌ」は、地域における民間の美術教育活動として非常に大きな役割を果たしたのである。

二紀会の伊佐昇は、ラボンヌからは3,000人余り

の子どもが育っていったことを記し、その指導方針は、「子供の絵に失敗はない、へたな絵でも、ひどい絵でもその時の自分の心や考えを表現したもので次の作品への原動力になる」ものであったという。さらに、熱心に子どものためのモチーフを探求し、教室そばの広瀬川河畔、前橋公園、神明宮、利根川、榛名山などに写生に連れていくこともあったという¹。

また、群馬大学学芸学部附属中学で美術教師として教鞭をとった二科会の高橋晴人は、「ラ・ボンヌで勉強した生徒の中から卒業後、中学校の美術教師になったり、デザイナーや美術館の学芸員など、美術方面に進む者が多かった」と述懐している²。

このように、ラボンヌは非常に多くの子どもたちを美術に結び付ける役割を果たし、その教育は社会における美術の発展に確実に結びついているのである。本稿では、このような近藤の業績のなかの美術教育の側面に注目したいのである。そのことは、戦後の前橋における民間による美術教育運動についての検討にもつながるはずである。

さらに、ラボンヌへの注目には次の経緯も関係する。2016年、群馬大学はアーツ前橋と連携し、文化庁の助成（平成28年度文化庁 大学を活用した

文化芸術推進事業「美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人事育成プログラムの構築と実施・評価」を得て、アートマネジメントに関わる人材育成を行った。この事業では、各種実践を行う複数のコースが設けられ、実践講座Cコースでは、前橋市内の私設美術館である広瀬川美術館を活用して、ワークショップや展覧会を実施することとなった。このコースの理念とは、かつてラボンヌが地域の美術教育の中心であった、そのあり方を現代に新たなものとして再生することを目指すものであった。稿者はこのCコースで講師のひとりを務め、その関係で近藤嘉男とラボンヌの関係についての調査を実施することとなったのである。さらには、2016年7月31日に広瀬川美術館で開催されたシンポジウム「ラボンヌと生活造型実験室」(展覧会「わたしのアートエデュケーション展」関連事業、パネリスト：染谷滋、茂木一司、春原)でも、ラボンヌの意義が検討された。これらが、近藤嘉男とラボンヌに注目した契機である。

ところで、近藤についてはどのような顕彰や先行研究が見られるのだろうか。1979年の近藤の逝去以降、いくつもの動向を見ることができる。下記、主なものをまとめておきたい。

群馬県立近代美術館(1974年開館)の学芸員を長らく務めた染谷滋氏(元群馬県立館林美術館館長、元富岡市立美術博物館・福沢一郎記念美術館館長)は、同館が近藤の作品を収蔵する際からかわり、早くも1982年発行の『群馬県人名大辞典』(上毛新聞社)で、近藤の略歴をまとめている³。染谷氏は近藤嘉男研究の第一人者であり、本稿もその成果に多くを負っており、関連記事などの資料を多数ご提供いただいた。

さて1983年には、夫人・近藤久江によって遺稿集『音と灯 近藤嘉男の遺稿』(精興社)が刊行された。同年に刊行された『前橋市史 第五巻』(前橋市、1983年)での「美術」の節では、「絵画」の項において、前橋市出身・居住者で、画壇で注目された主な人物として近藤が取り上げられている(他に掲載されているのは南城一夫、清水刀根、川隅路之助、福田貂太郎、深谷徹、斎藤始雄である)。ここでは、ラボ

ンヌの開設や県展審査員が大きな業績として挙げられている⁴。

そして1989年には、前橋市民文化会館で回顧展が開催され、さらに72点の作品を収めた『近藤嘉男画集』(上毛新聞社出版局)が刊行された。本書の巻頭には、植村鷹千代が小文「近藤嘉男の画業を偲んで」を寄せ、近藤を30歳代後半から二紀会での付き合いのある「旧友」と呼ぶこの美術批評家とのつながりを感じさせる。

まとまった回顧展としては、29点の作品にあわせて資料が出品された前橋文学館「心象の画家 近藤嘉男の世界」展(1996年)があり、図録も刊行されている。

また、2013年の前橋市立のアーツ前橋開館記念展「カゼイロノハナ 未来への対話」には、近藤の代表作のひとつである《港のマリア》(1950年、アーツ前橋所蔵)が出品され、さらに展示と図録において「ラボンヌ」や「生活造型実験室」の前橋の文化向上に果たした意義が検討、確認された⁵。

このように前橋、群馬の画家として、その業績は注目されてきた。しかしながら、詳細な検討には未だ大きな余地が残されているし、ラボンヌの地域の美術教育活動としての意義は認められているものの、その実相については明らかにされていないとはいいたい。

そこで本稿では、近藤嘉男の実践したラボンヌについて、その具体的な活動や理念を検討し、また今後の本格的な研究のために、現時点までに明らかになった情報を整理・記録することを目的とする。なお、現状での調査・研究は不十分であり、さらなる資料調査等が必要である。本テーマについては本稿の後に続報を準備する予定である。

2. 近藤嘉男の略歴と画風

まずは近藤の略歴を概観しておこう。1915(大正4)年前橋市生まれ。実家は堅町(現、千代田町)の砂糖卸商「朝野屋」であった。神明幼稚園を経て、桃井小学校(現、前橋市立桃井小学校)に入学し、6年生の時に父に油絵の道具を買ってもらい、油彩

画を始めた。12歳、旧制前橋中学校（現、群馬県立前橋高校）入学（横堀角次郎や南城一夫、清水刀根、中村節也らも同中学校の卒業で、多くの洋画家を輩出している）、その後家業を継ぐため（東京に支店を出すため）に上京して13歳で東洋商業専門学校（現、東京都千代田区・東洋高等学校）に転校。同時に画塾・川端画学校（東京都小石川）に通う。さらに父の病のため15歳で群馬に戻り、前橋市立商業学校（現、群馬県立前橋商業高等学校）に転校した。

15歳で上毛美術展に初入選、19歳で白日会入選。1936年、21歳で二科展入選、1941年まで出品を続け、画歴を積んでいくこととなる。

その後応召し、満州から南方戦線に移り、8年の戦地での生活を終えて1946年に復員した。

1947年、宮本三郎、熊谷守一、田村孝之助、正宗得三郎らは二紀会を設立。近藤はこの年32歳で二紀会春季展に出品して春季展賞受賞。その後、前橋に「二紀会洋画研究所」と絵画教室「ラボンヌ」を開設。翌年、第2回二紀展では《制作期》が二紀展賞を受賞し、同会の同人となった。宮本の意向を受けて1948年には二紀会群馬支部を結成した。

群馬においては、1950年の群馬県展に招待出品、さらに審査員として参加。1966年の前橋市民展発足時には運営委員・審査員として尽力した。

1964年に西欧に外遊してからは、たびたびフランス、イタリア、スペイン、ポルトガル、ギリシャなどを巡り、多くの南欧風景画が残された。

絵画のほか、木彫、書、短歌、俳句をよくし（号、春駿雨）、随筆も多い。

現在作品は、主に近藤の旧アトリエ・自宅で息子が運営する広瀬川美術館のほか、アーツ前橋、群馬県立近代美術館、県内の個人・企業・団体などが収蔵している。

その作風は、都市の様々な風景や光景、場所、身近な人物をモンタージュ的に配置した、心象風景をモチーフとしたものが多数見られる。ほぼ同世代に活躍した、野田英夫（1908～39年）や松本竣介（1912～48）の影響を感じさせる作品である。

3. 絵画教室「ラボンヌ」子供クラス

それでは、本稿の主題について考えていきたい。「ラボンヌ（La Bonne）」はフランス語で「良きもの」の意である。先ほど略歴で確認したように、1948年、33歳の時に前橋で、アトリエ兼自宅に「近代絵画研究所」（のちに「第二紀会研究所」と改称）と、絵画教室「ラボンヌ」子どもクラスを設立した（「ラ・ボンヌ」と表記されることもある）。以降、32年間にわたって教室を運営し⁶、子どもたちの展覧会であるラボンヌ展を開催していくこととなる。なお、染谷滋氏によれば、開設時期には1947年から49年までの諸説がある⁷。

教室の方針は、子どもの表現の実験性や自由さの重視であった。描く対象は自由で、教室には、子どもたちのためのモチーフとして、様々な人形や民芸品が集められた。前橋市内の河畔、公園、動物園、遊園地などでの写生も行われた。

当時、このような美術教育施設は周辺にほとんどなく、遠方からも多数の生徒が通った。また、前橋市のみにとどまらず、渋川市と太田市でもクラスを開設していた。

1953年6月14日の『上毛新聞』は、「おけいこ（3）えの勉強」と題して、ラボンヌの様子を伝えている。2、30人の子どもが思い思いに描いている。教室は土曜の午後から日曜の夕方にかけて行われた。学校での時間やカリキュラムに縛られた美術と対照的な、すべての活動を子どもたちの自由意志によるものとしている。生徒の80パーセントは絵が好きで来ていて、20パーセントは絵が嫌い、「けいこ」に来ていたというが、「嫌いで入所した子も嫌いのままでは終らず、ある美しさをその子なりにとらえてすきなようにまとめていく」という。保護者の要望は、絵を描くテクニックの向上が多いようだが、近藤は「しかしね、自由教育なら、手は肩から出なくてもいいし、目をかかなくたっていいと思うんですが」という。

指導陣については、例えば1973年の「LA・BONNE 後援会名簿」（広瀬川美術館所蔵）の巻末には指導者の名前が記されているが、近藤のほか、

二紀会同人として牧ヶ谷久江、同じく二紀会同人として猪熊修が名を連ねている。1976年の名簿では、先の3人に近藤節（近藤嘉男三男）が加わっている。

また、ラボヌは展覧会場（「ラボヌ画廊」）としても活用され、宮本三郎、熊谷守一ら、二紀会を中心とした作家や、梅原龍三郎、安井曾太郎、藤田嗣治、東郷青児、岡本太郎ら、当時の著名画家の作品56点による展覧会を行った（1949年7月1日から10日、「第1回現代大家洋画展」、前橋美術研究会主催）。このような展覧会は東京では開催されていたが、前橋ではなかなか見ることのできない非常に貴重な美術啓蒙・普及の機会であった。

このようにラボヌは、様々な側面で、地域の学校外の民間による美術教育、しかも広い意味での美術普及も含む活動の一大拠点となっており、学校的美術科教育にも影響を与えていたはずである。

ところで稿者は、2016年5月に、かつてラボヌの運営や近藤との関わりのあった3名の画家に聞き取り調査を行った。いずれも当事者による貴重な証言であり、以下にその概要をまとめ、記録しておきたい。

ラボヌにおいて近藤の助手を務めた猪熊修氏⁸は、自身も小学校低学年から毎週ラボヌに通っていた。自宅のあった地域からは遠方にもかかわらず他にも何人かの子どもが、14キロもの道のりを前橋まで通っていたという。氏は後に群馬大学教育学部美術専攻を卒業し、中学校教員を務めたが、画作に専念するために退職し、そして近藤の下で働くことになった。また、絵画を師事するなかでは、自分の殻を打ち破ることや常識と異なることを実行することの重要性を教えられたという。

猪熊氏は、近藤から渋川市および太田市で開設されたクラスを任された。渋川クラスは、渋川市の白ばら幼稚園（1958年開園）を会場として借りて月曜日の午後を実施したという。このクラスには幼稚園児から小学生まで20人程度の子どもたちが通っていたという。一方、太田クラスは太田幼稚園を会場として毎週土曜日の放課後に実施された。ここには30人程度の子どもたちが通い、幼稚園周辺の風景などを描かせたという。

牧ヶ谷功氏⁹は、近藤に絵画を師事し、中間色を大切にすること、セザンヌやボナールの重要性を伝えられたという。自身はラボヌに通わなかったものの、前橋の街中の子どもたちや、さらには遠方から通う子どもたちの姿を見て、うらやましく感じたという。

そして、まだ前橋に画材店が少なかったころに、東京で絵の具などを仕入れ、ラボヌ内での販売を行ったという。このようにラボヌは、画材の面からも地域への美術の普及を実践したのであった。

北村真氏¹⁰は、近藤からラボヌの太田クラスの担当を依頼された。開設の毎週土曜日には、多くのモチーフや画材を抱えて苦勞して太田へと赴いたという。

印象的なエピソードとして、北村氏が29歳の時に二紀会で受賞した際には、近藤はとても喜んでくれて、前橋にある各新聞社の支局を連れ歩き、紹介してくれたという。また、近藤による作品の批評は厳しく禅問答のようで、描画が不十分な作品に対しては「わからない」としか発せず、しかしその意図は本質を突かなければいけないと解されたという。このような本質論で物事をとらえる態度は一貫していたということである。

では、次節では、教室であるラボヌの成果を展覧会として毎年発表した、ラボヌ展の実際について見ていきたい（新聞記事や目録等によって開催が具体的に確認できた年について記すこととする）。

4. 「ラ・ボヌ児童画展」と二紀会群馬支部

さて、二紀会群馬支部の第1回展は1948年11月に群馬大生無尽株式会社（現、東和銀行）の階上で開催された。第2回展は1950年、第3回展が1951年11月23日から25日にかけて開催されている。第3回展では、『上毛新聞』の報じるところによれば、二紀会展において入選した9名の16点を中心に、「児童部」（つまりはラボヌであろう）の水彩・クレヨン作品が加わり、さらには宮本三郎（1905～74年）、峯岸義一（1900～85年）、橋本徹郎（1900～59年）、栗原信（1894～1966年）らの特別出品も行

われた¹¹。島岡實は、二紀会の傾向は、リアリズムと社会生活の統合と近代的造形による感情表現の2つに大別され、群馬支部において後者を代表するのが自分で、前者を近藤が代表し、両者が「生活に根を持つた造型言語」を目指すと説明している。これはラボンヌにおいても適応されていた理念であるように思われる。

さて、『群馬県文化年鑑 1954』（群馬県文化協議会、1954年）は、二紀会群馬支部が、1953年11月15日から3日間、「ランボンヌクラス展と併せて、煥乎堂と麻屋にて県支部美術展を開催、二紀会出品点数三十点、ランボンヌクラス展は一五〇点を出品した」と記録している¹²。

なお、同年鑑に掲載する美術団体は17である。このなかで近藤が主宰するのが、非常に誤植が多いのであるが、「①第二組合絵画研究所、ポンタ子供クラス ②前橋市豎町四二 ③昭和二十一年七日 ④洋画 ⑤第二組合主張通り」という表記の団体であろう¹³。住所が近藤の自宅に一致する。「第二組合」は「第二紀会」の、「ポンタ」は「ラボンヌ」の、「七日」は「七月」のそれぞれ誤記であろう。

以上見てきたように、二紀会の群馬支部展とラボンヌ展はセットで実施されていたことがわかる。子どもたちと群馬の二紀会、その相互のつながりを読み取ることができる。二紀会の群馬支部と、そこに繋がっていく児童部としてのラボンヌの位置づけである。そして、ラボンヌの展示は児童の作品とはいえ、二紀会群馬支部の作品の5倍の数が出品され、一定の規模を持った展覧会になっていた。

二紀会の伊佐昇は、二紀会群馬支部とラボンヌの関連について次のように述べている。

群馬二紀会発祥の地に共存したラ・ボンヌは現在まで約二〇〇〇余名の児童を送り出し戦後前橋市の洋画普及に多大な影響を与えた。近藤嘉男が創生二紀会の将来を見据えながら地域の児童絵画教育に努めた業績はいま幾多の人材が育っている事で目的が達せられている。¹⁴

新たに誕生した二紀会に対し、その発展にむけた

地方に根差した試みのひとつがラボンヌであったといえるだろう。しかしながら、その初めの目的は美術団体に付随するものだったのかもしれないが、その波及効果は広く強く地域に還元されていったように思われるのである。

1955年の第7回ラボンヌ展も、二紀会群馬支部展と同じ会期（1955年10月28日から3日間）で行われている。ラボンヌ展の会場（第1会場）は、前橋市桑町・スズキヤ画廊、二紀会展（第二会場）は、前橋市・煥乎堂画廊であった。『上毛新聞』は、「ラ・ボンヌ子供クラスの作品が二百五十点、会場せましと飾られた油絵、水彩、クレヨン画など子供たちの思い思いの色で織りなすふん囲気が華やか」と、さらに「二紀会の県内入選者の作品が約五十点陳列」と報じている¹⁵。ラボンヌ展の出品作品は数年のうちに百点以上増加し、規模を大きくしていることがわかる。子どもたちの年齢層も多様であるためか、使用される画材も、油彩、水彩、クレヨンと多彩である。

1956年の第8回ラボンヌ展は、1956年10月26日から3日間、第1会場が鈴木ストア画廊（鈴木ストアビル：現存）、第2会場が麻屋三階画廊（麻屋デパート：1934～64年、2011年解体）、第3会場が煥乎堂画廊（煥乎堂旧本店：1954年～）と¹⁶、さらに大規模に開催された。いずれの会場も、現在の前橋市千代田町の特定の地域にかたまり、前橋駅からラボンヌ（近藤のアトリエ）までの商店街の道筋に位置していた。特別な場ではなく、市民の日常生活のなかに、毎年のようにラボンヌの子どもたちの作品が現れていたわけである。このような状況も地域の美術普及——例えば子どもたちの表現とはどのようなものであるのかを社会に具体的に示すこと——に好影響であったに違いない。

1957年11月1日から3日まで、第9回ラ・ボンヌ子供クラス展が鈴木ストア画廊で開催された。出品点数は約150点、『上毛新聞』は「明るい色彩が好んで使われていること、畳一枚ほどもあるかと思われる大作が目立っていた。優秀作品には上毛新聞社賞などが贈られる」と報じた¹⁷。この展覧会が、例えば二紀会のような美術団体展のように、コンテス

ト形式をとっていたことがわかる。明るい色彩については、近藤の指導の方針が反映されているといえるだろう。

1958年11月初旬、第10回ラボンヌ展が開催された。『上毛新聞』には「上毛新聞社賞」3名、「ラ・ボンヌ賞」11名、「他入賞者」19名の入賞者の氏名と学校名が掲載された¹⁸。

1961年10月、二紀会の将来のための人材育成というラボンヌの目的がひとつの成果を生んだ。二紀会展（東京都美術館、10月11日から30日）に、中学生からラボンヌに通っていた19歳の少女の作品が同会の「褒賞」を受賞したのである。今回は同会への3回目の出品で、1959年高校3年生の時に初入選していた¹⁹。また、この年の第13回ラ・ボンヌ児童画展は、11月3日から煥乎堂画廊にて約200点の作品によって開催された。なお、「県教委賞」1名、「前橋市教委賞」1名、「上毛新聞社賞」3名の授賞式が5日に開催されている²⁰。

1966年1月、第18回ラボンヌ児童画展が前三デパート（1964～85年）で、約200点の出品により開催された。『上毛新聞』には各受賞者の氏名が発表され、「県教育委員会賞」1名、「前橋市教育委員会賞」1名、「ラ・ボンヌ会員賞」5名、「上毛新聞社賞」3名、朝日・毎日・読売・日本経済・産業経済・東京の各「新聞社賞」が各3名（「日本経済新聞社賞」は6名、「東京新聞社賞」は5名）、「教育美術賞」10名、「鶏杯賞」5名であった²¹。

同年12月、第19回ラボンヌ展が前三デパート6階で開催された。『上毛新聞』によれば、「四歳の幼稚園児から中学一年生の自由画約二百七十点」が展示され、やはり画材は油彩、水彩、クレヨンと多様である。「これほどたくさんの児童画を集めた作品展の開催は県下では珍しく」と報じられている²²。ラボンヌが地域において未だ数少ない民間の美術教育機関で、その影響力が大きいことを示している。

1968年1月、第20回ラボンヌ児童画展が開催された。

1969年5月、第21回ラボンヌ児童画展が前三デパートで開催され、昨年の二紀会に入選した生徒の作品から3歳児までの約300点が展覧された。『上

毛新聞』には、「群馬県教育委員長賞」1名、「前橋市教育委員長賞」1名、「上毛新聞社賞」6名、「努力賞」3名の氏名が掲載された²³。

1971年8月19日から23日まで、第22回ラボンヌ児童画展が前三デパート6階催場で開催された。目録によれば²⁴、主催は「ラボンヌ後援会」、後援は「群馬県教育委員会・前橋市教育委員会・朝日新聞社前橋支局・毎日新聞社前橋支局・読売新聞社前橋支局・東京新聞社前橋支局・サンケイ新聞社前橋支局・サクラクレパス株式会社」である。また、目録には130人の出品児童の氏名が記載されている。なお、主催のラボンヌ後援会とは、この教室に通う児童の保護者によって構成されるグループであった。

1972年2月15日から20日まで、第23回ラボンヌ児童画展が、前三デパート6階催事場で開催された。この回では昨年の後援者に「群馬テレビ」が新たに加わった。目録の表紙には、ラボンヌに通学する幼稚園児による人魚を描いた作品が用いられた。また目録には、出品児童の氏名が掲載され、幼稚園生29名、小学1年生29名、小学2年生11名、小学3年生11名、小学4年生17名、小学5年生13名、小学6年生4名、その他10名であった²⁵。児童の比重が幼稚園生や小学校の低学年に重きが置かれているのが、ラボンヌの特徴のひとつとすることができるであろう。

1973年9月4日から9日まで、第24回ラボンヌ展が前三デパートで、約250点により開催された。『上毛新聞』は、「身のまわりの興味のあるものを中心テーマにかかっているだけに、パンダや怪獣、飛行機、新幹線などが登場」と報じている²⁶。

1974年8月21日から25日、第25回ラボンヌ児童画展が前三百貨店6階で約250点の作品によって開催された。今展はラボンヌの25周年記念展でもあった。『上毛新聞』によれば、会場は「学童や親子連れ、買い物に訪れた主婦たちでにぎわって」おり、「動物、自然に夢をまじえた自由ほん放なタッチで描かれた作品が展示されてい」たという²⁷。同記事によれば、この年の受賞者は、「二十五周年記念賞」3名、「ラボンヌ賞」1名、「県教育長賞」1名、「前橋市教育長賞」1名、「上毛新聞社賞」5名、朝日・毎日・

読売・サンケイ・東京の各「新聞社前橋支局賞」が各5名、「群馬テレビ賞」4名、「サクラクレパス賞」5名、「三共賞」5名であった。50名が何かしらの賞を受賞していることになる。なお、この回の目録によれば、出品児童の合計は128名（前橋91名、渋川13名、太田23名）であった²⁸。多くの子どもたちに、美術における受賞の経験をさせる意図があったのであろうか。

なお、同年11月には、初めての試みとして、ラボンヌの渋川クラスの展覧会が、クラスが会場としていた白ばら幼稚園（渋川市並木町）で行われた。幼稚園児から小学6年生まで約50点の作品が展示された²⁹。

さらに1979年の近藤の没後以降であるが、「第32回ラボンヌ展目録」は1982年8月27日から9月1日にかけて、西武デパート7階で開催されている³⁰。

美術団体である二紀会の地方（群馬）における拠点としての活動に並走した子どもたちのためのラボンヌは、美術団体の活動による文化振興につながる人材を育成したが、さらに定期的な展覧会活動、しかも後援や賞に新聞社や画材会社を加えた大々的なものを継続し、絵画教室による子どもたちへの美術教育にとどまらず、子どもたちの表現の意義を、市民や県民に対して広く知らせ、地方への美術普及の一環を担っていたのであった。

ところで、近藤が直接の美術教育の対象としたのは子どもたちのみにとどまらなかった。1957年、42歳の時に大人向けの絵画教室「生活造型実験室」（のちに「造型ルーム」と改称）を開講しているのである。開講期間は2年ほどであると思われる。本稿では詳しく検討しないが、江川和彦、植村鷹千代ら、講師に著名な美術批評家や画家を招き、パウハウスを参考にしたカリキュラムが生まれ、生活に接近した工芸や手芸も含んだ講座が行われた。ここでは、生活と美術の融合が意図されていた。植村鷹千代は生活造型実験室を、「新進画家層や美術愛好者に対する啓蒙運動」「地方美術の啓蒙」と指摘する³¹。その言葉のとおり、この研究室もラボンヌ同様、地域における美術普及の試みであったと捉えることができる。

1955年3月16日から20日にかけて東京・京橋の国立近代美術館で開催された「松方コレクション 国立美術館建設協賛展」（国立近代美術館主催・松方氏旧蔵コレクション国立美術館建設連盟共催）に《ひまわりと壺》を出品している。このような美術作品公開に向けた運動にも近藤は関心を持っており、そこには美術普及に対する意思も汲みとれるのである。

5. 近藤嘉男の美術教育論

最後に、近藤の美術教育観と、同時代の動向について簡単ではあるが考察してみたい。

近藤はラボンヌをはじめて数年後の1951年に、『上毛新聞』紙上に子どもの表現における個性についての独自の見方について書いている³²。近藤は、子どもたちの表現に美しさや面白さを感じるが、自覚されておらず、偶然であるからそれは個性ではない。もし個性というならば、その児童画を捉える側の大人の解釈でしかないというのである。そして写実を指導方針にしている、「一つの写実という型に追い込んで、それでも抜けないものがある、それを私は個性だと思う」というのである。美術を志す青年たちに、新たな造形傾向・形式を模倣してごまかすのではなく、自然の美を画面に定着させる写実から出発するしかない、写実から逃げてはいけないと警告する。それが先人の成果の高さから出発できる科学と美術が異なる点で、各人が麓から出発し、写実において自然美を定着させる努力の過程を経るしかないというのである。

ただし、そのような指導の対象は小学校高学年以降を対象としたもののようであり、写実を意識して描くようなこの時期にこそオーソドックスな指導が必要であると述べている³³。

同時期に『上毛新聞』に掲載した自筆記事「児童と動物画」でも³⁴、近藤は写実の重要性を訴える。ただし、写実は大人による技術的な束縛ではなく、目で見て描く努力、観察を意識する態度を促すためのものであることを述べている。「目で描けといつてもよく見ろといつても、児童は詩人なので、目で見

るものを頼りにして詩人の歌を唱うでしょう」というのが近藤の児童観であった。

同時代、「写実か想像か」は児童画におけるひとつの論点になっていた。例えば京都市美術教育指導委員であった岡田清は、1953年に『児童画の芸術性』（教育美術振興会）を刊行したが、本書のなかで、当時の日本の児童画において、写生を第一に重視する態度を創造性が少ないと批判し、想像を生かした絵画を主張する動向が強いことへの疑問を、「児童画における写生の問題である。写生が適当か、想像画が児童画の本道か」というように呈している。岡田はそれを海外の研究者の思潮に影響されたものであると分析し、写実が創造ではないというのは非論理的で、日本の子どもの生きる社会は海外と異なっており、「後進日本は、世界的水準につくためにも、子供たちは、写生によって、然も創造活動としての児童画を期待されることも仕方ない」と主張する³⁵。

あるいは、北川民次は1953年の著作『子どもの絵と教育』（創元社）で、「真の写生とは視覚だけによる自然の模写ではなく、児童の初期に育てられた内部の世界と後から入ってくる外部の世界とが、矛盾を起さずに合体するという作用の下に描かれなければならないものであります」と³⁶、教員の写実に対する認識がずれているという現状に迫られ、写実の意義を改めている。

さて、以上のような写実に着目する近藤の美術教育観は、次のように生活という点に帰結していた。

子供を教えるということは、教える者も共に子供等の世界に於て生活を共にするという以外にはないと思う。児童等の現実の生活をよりよく、より満足に、より拡充されたものにさせることが教えることなのである。³⁷

このような現実における生活の充実のための美術という態度は、近藤において一貫しているように思われる。そしてそれは、時代の傾向でもあった。

近藤と同時期の1940年代の終わりから1950年代の初めにかけての、画家による児童に対する美術教育参与の動向としては、例えば、自由美術協会の画

家・池田栄によって1950年に千葉県多古町に設立された「多古子供アトリエ」の実践が想起される。戦前の1938年から40年にかけて、群馬出身の福沢一郎による福沢絵画研究所で学び、応召・復員ののち1946年に自由美術家協会の会員となった池田は、1950年8月に「多古子供アトリエ」を開設、1952年から54年にかけて3回の「読売アンデパンダン展」に、子どもたちの共同制作作品9点を出品、広く社会に向けて発表した。池田はこのアトリエをはじめたころの関わる人々たちの熱量を次のように書いている。

敗戦直後の解放感のなかで情熱的に自由を求める人々には新しい文化を創り出そうとする意気もさかんだった。予期しなかったほどの多くの皆さんの支援を得て、多古子供アトリエの仕事をはじめることができたのである。子どもたちとその親たちと文化創造への意気さかな友人たちと毎日連続の活動で、農業をやめ、描くこともやめ、ついには土地も家も売却して子どものためのアトリエを建て、絵の具やキャンパスを揃え、子どもたちの創造活動の道を開くことに打ち込んでいった。³⁸

この表現から当時においては、戦前戦中に抑圧された自由の、終戦を迎えた社会における象徴、発露として児童画が捉えられているように思われる。この点はラボンヌの活動にも共通するといえるだろう。

子どもたちは放課後と休日は池田と生活を共にして、「アトリエは子どもたちの生活の根拠地」となった³⁹。近藤の考え方にも似たところがないだろうか。ただし、多古子供アトリエで池田が行った教育は、子どもたちの共同制作の重視に特徴があり、池田の狙いも協同性に向けられていた。

6. おわりに

以上見てきたように近藤は、子どもたちの日常生活の中の美術を、あるいは子どもたちの生活と美術

の結び付きを志向していた。戦後に獲得された新たな「自由」を、美術と生活との融合によって、児童画の世界を通じて前橋の社会に提示し続けたのである。そして子どもたち自身にもその「自由」の意義を絵画によって実感させていた。しかも1940年代末という戦後いち早い時期、いまだ敗戦の気配が色濃く漂う占領下の日本において、群馬・前橋という地方で、地域の子どものための民間による美術教育がすでに行われていたことは評価されるべきではないだろうか。1953年2月25日から3週間、珍しい美術館での児童画展「第1回 児童生徒作品展」が神奈川県立近代美術館で開催されている⁴⁰。このように美術教育、美術による教育が注目されつつあった時流において、近藤は先見性をもってその仕事にあたっていたのであった。

〔附記〕

本稿にかかわる調査および執筆にあたっては、染谷滋氏、広瀬川美術館（近藤浩通氏、近藤節氏）、猪熊修氏、北村真氏、牧ヶ谷功氏、アーツ前橋のご高配を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

本稿は、文化庁「平成28年度 大学を活用した文化芸術推進事業 美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価」の助成による実践・調査の成果に基づくものです。

注

- 1 伊佐 昇「洋画家近藤嘉男の軌跡」『心象の画家 近藤嘉男の世界』前橋文学館、1996年、頁付けなし。
- 2 高橋晴人「近藤嘉男先生のこと」『心象の画家 近藤嘉男の世界』前橋文学館、1996年、頁付けなし。
- 3 染谷 滋「近藤嘉男」『群馬県人名大辞典』上毛新聞社、1982年、219頁。
- 4 『前橋市史 第五巻』前橋市、1983年、478頁。
- 5 M.T. (辻 瑞生)「日常生活のなかで美術文化を育んだ『生活造形実験室』」『カゼイロノハナ 未来への対話』美術出版社、2013年、44-45頁。
- 6 ところで1948年、師である宮本三郎は、金沢美術工芸専門学校（現・金沢美術工芸大学）の教授に就任している（1950年まで）。宮本のこのような動向も、近藤の意識を美術の、あるいは美術による人材育成に向けさせた一因だったのだろうか。
- 7 染谷滋責任編集「前橋美術文化年表」『カゼイロノハナ 未来への対話』美術出版社、2013年、172頁。
- 8 2016年5月12日前橋市内にて聞き取り（聞き手：春原）。
- 9 2016年5月7日前橋市内にて聞き取り（聞き手：春原）。
- 10 2016年5月30日安中市内にて聞き取り（聞き手：春原）。
- 11 島岡 實「群馬二紀展について」『上毛新聞』1951年11月18日4面。
- 12 『群馬県文化年鑑 1954』群馬県文化協議会、1954年、16頁。
- 13 同前、200頁。
- 14 伊佐 昇「群馬二紀」『二紀会50年史』社団法人二紀会、1998年、373頁。
- 15 （無記名）「鮮やかに秋を彩どる 前橋でラ・ボンヌ、二紀展」『上毛新聞』1955年10月29日。
- 16 （無記名）「第八回ラボンヌ展」『上毛新聞』1956年10月24日。
- 17 （無記名）「美術の秋 三展覧会開く」『上毛新聞』1957年11月2日。
- 18 （無記名）「ラ・ボンヌ展入賞者決る」『上毛新聞』1958年11月3日。
- 19 （無記名）「県下で初の「褒賞」受賞」『上毛新聞』1961年10月16日。
- 20 （無記名）「ラ・ボンヌ展開く 幼児の作品中心に二百点」『上毛新聞』1961年11月4日。
- 21 （無記名）「県教委賞に高橋さん ラ・ボンヌ展入賞きまる」『上毛新聞』1966年1月8日。
- 22 （無記名）「時の話題 はじまったラ・ボンヌ児童画展」『上毛新聞』1966年12月10日。
- 23 （無記名）「三歳児の力作も 前橋 ラ・ボンヌ児童画展」『上毛新聞』1969年5月15日。
- 24 「第22回ラボンヌ展目録」1971年8月、広瀬川美術館所蔵。
- 25 「第23回ラボンヌ展目録」1972年2月、広瀬川美術館所蔵。
- 26 （無記名）「夢があつて楽しい 前橋 9日までラ・ボンヌ展」『上毛新聞』1973年9月6日。
- 27 （無記名）「夏休みの力作250点 上毛新聞社賞に広瀬さんら5人」『上毛新聞』1974年8月24日。
- 28 「第25回ラボンヌ展目録」1971年8月、広瀬川美術館

- 所蔵。
- 29 (無記名)「のびのび真心描く 渋谷 ラ・ボンヌ児童画展」『上毛新聞』1974年11月29日。
- 30 「第32回ラボンヌ展案内はがき」1982年8月、広瀬川美術館所蔵。
- 31 植村鷹千代「近藤嘉男の画業を偲んで」『近藤嘉男画集』上毛新聞社出版局、1989年、頁付けなし。
- 32 近藤嘉男「二紀会三回展から 児童画について」『上毛新聞』1951年12月1日4面。
- 33 (無記名)「おけいこ(3) えの勉強」『上毛新聞』1953年6月14日。
- 34 近藤嘉男「児童と動物画」『上毛新聞』1951年12月27日夕刊。
- 35 岡田 清『子供の絵の芸術性』教育美術振興会、1953年、8-10頁。
- 36 北川民次『子どもの絵と教育』創元社、1953年、167-168頁。
- 37 前掲、近藤嘉男「二紀会三回展から 児童画について」。
- 38 池田 栄「多古子供アトリエ 1950年代の実践について」、正木基編『戦後児童画の一断面展 多古子供アトリエと読売アンデパンダン展』目黒区美術館、1994年、頁付けなし。
- 39 同前。
- 40 稲庭彩和子「神奈川県立近代美術館と小関利雄」『小関利夫と子供たちの世界』神奈川県立近代美術館、2005年、9頁。